



Title	戦後派知識人にとっての六〇年安保闘争 : 「若い日本の会」に着目して
Author(s)	黒川, 俊
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2026, 12, p. 21-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106313
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

戦後派知識人にとっての六〇年安保闘争

—「若い日本の会」に着目して—

現代日本学 博士前期課程 2 年

黒川 俊

はじめに

1958 年、「戦後派」（主に 1930 年代生まれ）知識人の結集する「若い日本の会」が結成された。警職法反対闘争を契機として生まれたこの会は、戦後史の分水嶺とされる 60 年安保闘争後まもなく自然消滅した。そして安保闘争を境に「若い日本の会」に参加した文化人たち-大江健三郎は戦後民主主義の守護者として、江藤淳、石原慎太郎らはその批判者として-別々の方向に分岐していった。

「若い日本の会」は、このように短命に終わりはしたが、「若い」戦後派の知識人たちが結集した場として重要な意味を持つ。戦後派の知識人は、どのような共通性を基盤として、また、どのようなズレをはらみつつ、結集したのか。そして、60 年安保闘争は、なぜ彼らの分岐を促すことになったのかを検討する。

また、本発表では「教養主義」という視点を導入する。教養主義とは、「人文学の読書を中心とした人格の形成を目指す態度」¹であるが、大正教養主義として学生文化に定着して以来、表面的な形を変えながらも 1960 年代まで存続していた。また、教養は単なる学生文化としてだけでなく、「知識人」という身分文化を獲得する手段²であり、それらをめぐる階層性や文化戦略的対抗関係などの視点は、教養主義を軸として知識人の間の分裂や対抗関係を戦後の知識人界の構造という基底から捉えることを可能にする。本発表は以上の視点を通じて、転換点としての 60 年安保闘争を戦後派の分裂から明らかにする試みである。

「戦後派」と「若い日本の会」

1950 年代後半に「戦後派」と呼ばれた 1930 年代生まれの世代は、戦後に中等教育を受け、民主主義のもとで自己形成した世代である。こうした位置づけが明確になるのは、1956 年頃、村上兵衛らによって「戦中派」という語が広まって以降であった³。それ以前には、「戦中派」も「戦後派」も「アプレ・ゲール」として一括され、軽蔑的に用いられていた。このように「戦後派」という世代カテゴリーは、同時代の言説のなかで次第に輪郭を与えられていった。

¹ 竹内洋『教養主義の没落』中公新書、2003 年。p. 40

² 竹内前掲 p. 25

³ 座談会「戦中派は訴える」（『中央公論』56 年 3 月号）、村上兵衛「戦中派はこう考える」（同 4 月号）など

「戦後派」をめぐる議論は、鶴見俊輔・久野収ら思想の科学研究会によって早くから進められ、1950年代後半になると、加藤秀俊や後藤宏行など当事者世代自身が、その世代的意義を積極的に捉え返すようになる⁴。鶴見・久野が定義する「戦後派」は1919年から1933年生まれまでを含む広い区分であり、三島由紀夫と石原慎太郎のような異なる戦中・戦後経験をもつ世代を包含していたが、「戦中派」の登場とともに、戦後派独自の世代経験が次第に意識されるようになった。加藤は、「中間文化論」を展開する中で、戦後における教育水準の向上とマス・コミュニケーションの発達を背景に、「戦後派」を、民主主義的感覚を共有し、同世代間の職業的・階層的な文化的障壁やインテリ／大衆の隔たりの弱い「新しい市民層」と位置づけた。一方、後藤は、アプレ・ゲール世代の既成の価値基準を拒み、一見ドライな契約主義や利己主義のなかに、相対性・多元性を見だし、主体的な「実感」を重視する世代として戦後派を捉えた。

こうして「戦後派」の輪郭と意義が明確化されてきつつあるなかで、「若い日本の会」は、1958年11月、警職法闘争の際に江藤淳の呼びかけによって結成された。運営上の世話役は、江藤淳・開高健・谷川俊太郎・羽仁進・浅利慶太である。その他にも中心メンバーとして大江健三郎や石原慎太郎の名が挙げられる。安保闘争時には、5月30日の集会で「民主主義よ、よみがえれ」というスローガンのもとに、300人以上が集まったといわれている。江藤淳は警職法闘争時の運動の特徴を「第一にぶちこまれたことや引っぱられたことのない連中が集まっているということ、つまり憲法を侵害するような法律案に反対するということは憲法によって解放された現実のなかで行動してきた若いジェネレーションの責任だということをはっきり声明したということ。もう一つは各ジャンルの若い人々が一堂に会して、一つの連帯の場所をもったということ」⁵と述べている。すなわち、戦前世代のように治安維持法などの弾圧経験を共有するのではなく、憲法と民主主義を擁護するという原則が、戦後派の結集を支える基盤となったのである。また、各ジャンルを越えた連帯は、新しい総合芸術を生み出そうとする総合芸術運動としての射程ももち、テレビ番組「半常識の眼」の制作はその一例であった。市民運動においても、江藤は労働歌や軍歌調の歌に象徴される旧世代の運動スタイルに対し、それぞれ異なる立場と利害をもつ人々が参加する「斉唱ではなく、多声部の複雑なフーガ」のような運動によって、「政治と生活の間」の断層を埋めようとした⁶。そこには、固定的な価値や組織に個人を回収せず、多様な主体の連帯を志向する戦後派の民主主義的感覚が表れていた。

「戦後民主主義」と「教養主義」

⁴ 思想の科学研究会編『「戦後派」(アプレゲール)の研究』(養徳社1951年)、鶴見俊輔・久野収『現代日本の思想』(岩波新書、1956年)、加藤秀俊『中間文化』(へいぼんぶっくす、1957年)、後藤宏行『陥没の世代：戦後派の自己主張』(中央公論社、1957年)

⁵ 座談会「統一の芽をどう育てるか-警職法反対運動の経験のなかから-」(『世界』1959年1月号) p. 231

⁶ 江藤淳「声なきもの」起ちあがる(『中央公論』1960年7月号)

教養主義とは、大正期に成立した近代日本における学歴エリート文化である。西洋古典をはじめとする読書を通じた人格陶冶、立身出世やお金よりも内面的な問題に重きを置き、人格の向上を目指す態度である。学生文化としての教養主義は、大正後期から昭和初期にかけてのマルクス主義の隆盛によって批判的となるが、このマルクス主義自体、思考の型としての人格主義・精神主義的な面では教養主義と共通しておりその連続性が指摘されている⁷。こうした人格主義的なマルクス主義的教養主義は戦後に復活を遂げる。一般的に教養主義というと大正教養主義を指すことが多いが、丸山眞男に代表される近代主義者や戦後の主体性論争にはそういった大正教養主義の人格主義や理想主義との連続性が多く見られ、マルクス主義的教養主義と人格主義的な戦後民主主義は同伴して戦後の表舞台に登場した。

この点を考えるうえで、日本型教養主義の担い手の階層性は重要である。ドイツの教養市民層やフランスのエコール・ノルマル・スーペリウールに代表される教養エリートが上層ブルジョア層を基盤としたのに対し、日本では教養主義の中心であった旧制高校、さらにその「奥の院」である文学部に地方出身者が多かった。日本の教養主義が、刻苦勉勵的で農村的な修養主義を起源としていたのは、こうした階層的特徴を反映している。そのため、独仏では教養文化とブルジョア文化が比較的連続していたのに対し、日本では両者の連続性が弱く、教養主義は享楽・実利・消費といったブルジョア的価値に対して精神性や人格性を対置する対抗的な文化となった。マルクス主義的教養主義は、この価値の対抗関係をさらに強めたものである⁸。

以上を踏まえ、大江健三郎と石原慎太郎の戦後民主主義／教養主義との距離を比較する。1932年生まれの大江が旧制中学から新制高校への移行を経験したのに対し、1935年生まれ（早生まれなので1934年の代）の大江は最初から新制中学教育を受けた。特に地方出身の大江にとって、新制中学における民主主義や憲法との出会いは、思想形成の重要な契機となった。大江による戦後民主主義の受容は、その教養主義的なあり方を典型的に示している。彼は「ぼくは、この憲法を非難する声を聞くたびに、自分の人格を否定されているような不安を感じるのである」⁹と述べ、憲法を自己の人格と不可分なものとして内面化していた。また、全国的なデモクラシーの気分のなかで、東京の中学生と「おなじ場所、おなじ時点」に立っていると感じ、地域的な劣等感をもたなかったとも回想している¹⁰。民主主義は大江にとって、地方と都市のギャップを埋めるとともに、人格形成のモラルでもあったのである。

大江自身も、こうした憲法や民主主義への強い思い入れを特定の時期の地方に特有の現象と捉え、青年期の自分にとって「戦後」が明るいものであったのに対し、都市部のインテリは二・一ストなどを契機に「暗い戦後」を経験したのではないかと述べている

⁷ 竹内前掲『教養主義の没落』2003年、筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店、1995年。など

⁸ 竹内前掲『教養主義の没落』2003年

⁹ 大江健三郎「戦後世代と憲法」『厳肅な綱渡り』所収1965年、p. 135

¹⁰ 大江健三郎「第一部のためのノート」『厳肅な綱渡り』文藝春秋新社、1965年、p. 17

¹¹。この対照は石原の証言とも符合する。都市部の中学・高校で民学同に入り、学生運動やレッド・パージの雰囲気接した石原は、地方で「純粋培養」的に民主主義を受容した大江とは異なり、デモクラシーに「付け焼き刃」の感覚があったと回想している¹²。

さらに石原には、肉体主義による反教養主義的な性格がみられる。『処刑の部屋』では、思想研究会の学生を「張って行く肉体がない」「頭でっかちの、裸にすれば痩せっぽちのインテリ野郎インテリ野郎」と罵る主人公を描き、教養主義の象徴暴力に対して肉体を対置している。竹内洋は、石原が「刻苦勉勵的教養主義」に都市の遊民文化や肉体を対置し、新制高校・非帝国大学・都市ブルジョア文化の側から「教養知識人のハビトゥスと身体を相対化した」と指摘している¹³。このように、大江が戦後民主主義を人格形成のモラルとして内面化したのに対し、石原は都市的な戦後経験と文化的位置から、その背後にある教養知識人文化そのものを相対化していたのである。

安保闘争と「戦後民主主義」批判

本節ではこれまでの議論を踏まえて、安保闘争後の戦後民主主義批判を見ていく。ここでは紙幅の関係上、江藤淳の批判のみを見ていくことにする。江藤は石原と同じように都市出身のエリートで、旧制湘南中学での同級生である。江藤の批判を見てみると、その批判の論理や構図は、モラルとして憲法や民主主義を捉える戦後知識人の思考の型の批判と、それに対する生活者や実務家の対置である。特に、「あらゆる思想、道徳が政治的になり、あらゆる政治が思想、道徳的に眺められるようになった」¹⁴ことを批判している。安保闘争後、江藤淳は雑誌『中央公論』で「実務家の人間研究」という連載を始め、岩下文雄（東芝社長）清水康雄（清水建設社長）、古田重二良のような、教養主義的な人たちとは違うタイプの人々へ関心を移していく。以上の批判や対抗的に提示される人物像を見てみると、江藤による戦後派知識人批判の矛先は、制度としての民主主義や憲法にあるのではなく、戦後民主主義の教養主義的受容に対してであるということ。つまり、戦後における教養主義文化としての戦後民主主義にその批判の矛先が向けられていたと読むことができるであろう。

おわりに

以上の議論を踏まえて、結論は以下の通りの指摘ができる。安保闘争を機に、戦後民主主義を中心とする戦後の教養主義は求心力を失い、潜在化していた対立・対抗関係が顕在化したということ。そしてそれは、戦後派において、地方エリートで教養主義的な戦後民主主義を内面化した大江健三郎と都市出身エリートで教養主義のハビトゥスを相対化する立場にあった石原慎太郎・江藤淳という構図に象徴的に現れたのである。

¹¹ 大江健三郎「憲法についての個人的な体験」（講演）『厳肅な綱渡り』所収 1965 年、p. 142

¹² 座談会「われら民主主義の子ら」（『中央公論』1959 年 1 月号）。

¹³ 竹内前掲『教養主義の没落』2003 年 p. 127-128

¹⁴ 江藤淳「“戦後”知識人の破産」『江藤淳著作集 6 政治・歴史・文化』所収 p. 10